

『タイタニア』（原作小説・田中芳樹、アニメ版監督・石黒昇）

個人的解釈のファンジン二次小説

【認識〜或いはバルアミーの葛藤と姫君の髪飾り〜】

仮公開Ver.

文・龍魔幻

初稿・12月11日 ※最終改稿・2008年12月17日

初稿段階原作小説・第三巻『旋風篇』

初稿段階アニメ公開・第九話『小さな風』

状況基本基準・アニメ版優先、原作小説補完

想定時系列・アニメ第九話最中から十話までの間頃まで

該当原作時系列・第一巻 第三章、第五章 その少し後（たぶん）

公開日・12月22日

公開（仮）サイト箇所 <http://tytania-b.roler.com>

※お読みになる方へ、うっかり検索にかかってしまった方へ※

- ・ 本作はアニメ及び原作小説を元とした個人イメージの入った、完全に個人のファンジン作品です。
- ・ 公開状態なのでいつ移転するとも限りません。
- ・ ダウンロード、印刷、リンク等はご自由に…ですが、再配布はいろんな意味でご勘弁下さい。
- ・ 龍魔幻のメインサイト等の一覧は <http://roler.com> まで。
- ・ 当PDFファイル出力にはSOURCENEXT社の『ごきなりPDF』を利用しています。
- ・ 後日、改稿・修正等のヴァージョンも作ると思います。言い訳っぽい後書き等もそのころには付記されるかと……
- ・ このお話は、『らいとすたっふるール2004』及び、著作引用権を含む著作権法の基準にしたがって作成されています……
……少なくとも書き手はそのつもりです……（汗）

ジュスラン・タイタニア公爵が偶然に目撃した、彼のごく最近からの高級副官バルアミー・タイタニア子爵は、なにやら独自の都合で広域分野の一般範囲のデータ・ベースの端末機と対峙している様子だった。彼の着任からそれほど経たない後にジュスラン身边に現れて、元気に、ジュスランにとっては好ましく思える行動をする姫君のバルアミーに対する評価の一端の曰く、“ギスギスしている”のを遙かに超える雰囲気であからさまにしている、感情を直接にぶつけられているデータ・ベース端末機が哀れに思えるほどの光景である。

その機器自体が広域とはいえずタイタニア範疇に於いての一般範囲までしか読み込むこと自体ができないものであること。それ以上に、雰囲気や表情から操作の動作の細かな一端に至るまで、見て取れる感情があらゆるさますぎるからこそ、少なくとも不穏当な動機からの行動ではないだろう、と容易に判断できたので、ジュスランはさしあたっては、若すぎる高級副官の私事情の尊重を優先することにした。——現状、見て取れるバルアミーの性質からしても、能力からしても、不穏当な動機であれば、逆にそれをしっかりと隠すような場所や状況の選択、感情の制御や取り繕い程度はしよとするだろうし、実効も可能だろう。機器の選択などそれらの遙か手前のことである。その場合の動機の善し悪しは別として、その程度の頭は余裕をもって回るほどには才覚のある青年であろう、というのが、この頃のジュスランの彼に対する評価である。——

ジュスランのこの時にとる具体的な言動としては、苦笑しつつも、少なくとも彼に対するのとその耳に入るだろうと予測出来る範囲に対しては、見なかつたふりを決め込むことにする。

それから、その日のジュスラン自身の日程と、その都合からバルアミーに任せた事象との相互関係を思い起こし、十中の九以上の可能性をもって、彼の行動の起因を、おそらくはくだんの姫君に関する何かであろう、と自己の内でのみ推察する。

現実として、ジュスランの推察は、決して間違つてはいなかった。

*

*

人類の住む範圍の宇宙の、名義はともかくも實質上の支配者はタイタニア一族であるべきで、かつ、現状も少なく見積もっても七から八割ほどはそれを現実としている。

少なくとも、バルアミー・タイタニア子爵はそう信じている。

その支配者たるべき一族の中にあつて、彼自身の立場は、客觀的に見ても、彼の主觀から見ても、非常に曖昧なものである。

父エストラードはいわゆるタイタニア五家族の一の子として生まれ、五年ほど前まではその家督を嗣ぐ可能性の高い立場にあつた。

現実には、エストラードはその異母弟たるアジュマーンに主家の家督を持つて行かれ、藩王位はおろか公爵位すらその手をすり抜け、主流五家のひとつの分家という立場と侯爵位に甘んじるしかなくなっている。他者から見れば、それでも十分にタイタニア一族の主流の内に入るのだが、なまじの期待感のあつたが故に、当人、及びその正嫡子であるバルアミーにとつては敗北感が勝る。

それでも、現在であれば可能性は皆無という域には達していない。

アジュマーンが公認している子のうちの長子にあたる人物さえ、今は未だ“幼い”という表現の領域に入る年齢である。その意味にあつては、当代無地藩王アジュマーンの身に“何か”あつた時、その地位を継ぐ者がエストラード侯爵である、とうい公算は、バルアミーの主觀のみでなく、客觀的にも決して低くはない。

その条件を満たせば、バルアミー自身の立場もまた、タイタニア五家族の近しい傍流の嫡子、という立場から、タイタニア五家そのものの、上にくすれば四公爵の一の、どころか、藩王そのものの嫡子、という立場に変

わることが出来るはずである。

中途半端に近くにあるからこそ、五家族直系とその傍流の距離の遠さを身をもって感じる。そして彼の感情は、それを自らの力で覆せ、と訴える。

タイタニアの慣習に於いては未成年とも見なされる、けれども時には成人並みの責任を問われることもある、十八才という彼の年齢もまた、その感情を裏面から助長させるのに一役を買っているかもしれない。

感情から出た結果の目標の産物を、バルアミーは野心と位置づける。故に彼は自らを雌伏する野心家であると位置づける。

生来の気質と、現在の環境と、彼の感情と自己認識とは、さしあたって、それぞれの相互影響に於いて矛盾の様相を見せてはいなかった。

タイタニア内部の地位は同時に、建前上の主君筋であるヴァルダナ帝国の公的な地位でもある。

バルアミーは少し前まで、ヴァルダナ帝国軍務大臣である父エストラードに付き従って、惑星リュテツヒの地表、皇宮である水晶宮バイエウスに近在するエストラード侯の私邸の一つに身を置いていた。その時点ですでに、彼自身の軍部での階級は准将であった。

そのバルアミー准将に、惑星リュテツヒの衛生軌道上に設立されている人工要塞にしてタイタニア一族の本拠地である“ウラニボルグ天空の城”からの召喚、

かつ、配属転換の命令が下ったのは、つい先日のことである。———ヴァアルダナ帝国に於いて、建前以外のほぼ全ての左右がタイタニアの無地藩王ラントレス・クラナイターの手にあるからこそその辞令でもある。バルアミーはそれを理解している。理解しているからこそ、彼の感情は反感を覚えるし、また、タイタニアの権威を信じているからこそ、この時期に異を唱えることは出来ない。バルアミーには、そう思える。———

彼に下った新たな配属は、タイタニア四公爵の一、『ジュスラン・タイタニア上將』の『高級副官』であった。ザーリツシュ・タイタニア公爵の流星旗軍討伐に於いて、副将としてジュスラン公もまた出征するにあたり、

宇宙海賊集団

というのが名目ではあるが、一度任官すれば、それが終わっても継続するに違いない地位と役職である。

年齢に比しても、また立ち位置そのものとしても、他者の羨望と妬心を買うに余りある地位ではあるが、バルアミーの感情にとっては、複雑な地位と場所である。

結局は四公爵の下であることを、今までよりも遙かに身近に感じ取られることになる。その反面、ウラニボルグの現在の中枢とも言える人物の近くに身を置くことが叶うのは、今の彼が目指す物にとっては都合が良いと解釈するべきでもある。だが、彼の内心を悟られないようにする注意は、これまでの数十、あるいは数百倍をも必要とするであろう。

様々な感情と迷惑を十八才の心中に押し込めて、バルアミー・タイタニア子爵はウラニボルグへと昇り、着任を果たす。

流星旗軍討伐はバルアミーの予測以上にあっさりと終結した。戦場そのものに於いてはザーリツシュ公指揮の下に終結し、着任当初にジュスラン公の語った通り、バルアミーどころかジュスランにさえ“やる事が無”かった。

“やること”は、戦後処理という形で訪れた。そこで、バルアミーはジュスラン公の高級副官として、それこそ全力を尽くした。当面を獅子身中の虫に徹するとしても、そうでないとしても、とにかく初仕事で無能扱いされることは、まずバルアミーの自尊心が許さない。

結果、少なくとも能力の面に於いて、ジュスラン公の信任を得る事は出来たようである。その反面、バルアミーには、場々と彼への信任を直接に口にするジュスランに対して、実は世に言われる“穏健派”というのを通り越して、“お人好し”の領域に達する人格の持ち主なのではないか、という認識が生じた。——その認識は、ほぼ直後にあっけなく覆されることになるのだが。

バルアミーの心中に困惑を呼ぶ事態は、その次の状況と任務、さらにその次に連続して命ぜられた任務に訪れた。

それは、エルビング王国の第二王女リディアのウラニボルグへの登城に始まる。

彼の王国およびその所有者一族たる王家王族は、バルアミーの価値観にしてみれば、国を称してもタイタニア一族に遙かに劣ると思われる存在である。悪く表現するならば“貧乏国”という言葉まで浮かぶ。さらには、王女殿下といえどリディア姫は十歳という、幼児とは言わないまでもせいぜいもって童女ないし少女といった年齢。

バルアミーが上官ジュスランに高級副官として付き従いウラニボルグに帰港した時、その貧乏国の姫君たる少女は、最初に彼女の応対をしたらしきアリアバート公の曰く“迷子”、厳密には、単身、行方をくらませていたらしい。藩王に直接面談を臨もうという動機だろう、というのがアリアバートの見解であった。実際、この直後にバルアミーが見たエルビング王国からの来訪者は、タイタニアの公爵に対する恐縮と、彼にとっては主である少女の身を案じて慌てふためくのが混在した、侍従らしき老人一人きりである。

王族だろうと何だろうと、やはり子供は子供だ、とバルアミーは思う。藩王に直接面談をするべき目的が何かは知らないが、無鉄砲にもほどがあるというものだ。

しかし、子供ゆえに、放っておけばそのうちには飽きるか何かでどうにかなるだろう、わざわざ探してやる必要は無い、とバルアミーが胸の内に密めて思う目の前で、上官であり一族中の上位者でもあるジュスランも、その同格であるアリアバートも、彼女を“迷子”と茶化しつつも、一応は“姫君”という扱いの表現をとる。

それはまだ、どうにかバルアミーの理解できる範疇に入らないでもない。実質はともかく、社交上に於いては確かに“一国の国王直系”と“一帝国の家臣一族”である。社交上の理屈を通せば、前者の方が上、ということ

になる。感情はともかくも、理屈としては理解が出来る。そして、バルアミーにとっては名実共に上位者に当たり、かつ目の前に在る人々がそういう態度や表現をとる以上、その配下であるバルアミーもそれに従わざるを得ない。ここもまだ、妥協の範囲に入る。——彼の感情が持つ客気を押さえつけるのにはいくらかの労を要したが。——

バルアミーの内心に反して、ジュスラン公爵は姫君搜索の指揮をバルアミーに命じた。

一王国の国王直系の人物、という部分だけで解釈すれば、その行方不明の搜索は秘密裏に、というのには理解ができる。四公爵の一では目立ちすぎる、というのも、五年以上を惑星リュテツヒは水晶宮近辺に身を置いていたバルアミーが、ウラニボルグに於いては顔を知られていない分、目立ちにくい、故に秘密裏の搜索指揮に適している、という理屈も、理解は出来るし納得の範疇には入る。

これを何かの嫌がらせかと思うのは、バルアミーの穿ちすぎであろう。彼自身、そう思う。迷子捜しと思えば気も滅入るが、混乱防止と擬似的にでも国交の不都合の要因を減らすため、と考えれば良い。その程度の思考の切り替えないし妥協は、どうにか可能であった。

現実に“迷子を保護した”時点で、リディア姫に対するバルアミーの内心の評価は僅かに変わる。正確には、変えざるを得なかった。

予測に反して、彼女をようやくに“確保”できたのは、藩王の執務室のまさに目の前、今にもノック・ボタンを押そうとしていた間際である。藩王近辺の警備がずさんに見えたのは、後に、藩王自らの意思であろう、とのジュスランの見解が示された。しかし、それが確であったにしても、とにかく何をどうしてか、十才の姫君の行動力は単身でその場に辿り着くにはおおよび、バルアミーの搜索能力はそれより以前に彼女を発見・確保することが叶わなかったのである。

“単なる子供”と彼女を認識すれば、“バルアミーの搜索能力は単なる子

供を確保することすら叶わない”と、自ら認めなくてはならない。さすがにそこまで自らを貶められるほど、彼の自尊心プライドは安くはなかった。と、すれば、少なくとも行動と目的達成の判断能力に於いては、リディア姫が“単なる子供”を上回るものを持っている、と認識を改めざるを得ない。——客観的にはともかくも、バルアミー個人はその二律背反を整合させなければならなかった。そうして、そういう事をしなければならぬ己に腹が立つし、認識を変更しなければならぬ事実も面白い物ではない。

さらには、その全ての感情をあからさまに悟られるような表情を出してはならない、というより、そんな事を表情にさらけ出すことを、バルアミーの自尊心は良しとしない。

その後、リディア姫はジュスランの説得を経て、藩王への直接対面を諦めて、事情と目的をジュスランに語り、藩王への伝達を一任する。彼女のウラニボルグへの登城の理由——自らを人質として、国を守りたい、というもの——は、バルアミーの価値観とは異なるが、この僅か十才の少女がなまかな意味で単純に一国の王族を自称しているのではない、ということ、説得を理解する程度の知識と理解力は持つていること、応じて、目的のために手段を変更することが自らの判断で可能であること、などを見ることになる。——それらを、リディア王女は背後に控える侍従の老人にすら、一言の意見を問うこともなく、決断を降したのだから。

紆余曲折を経て、ジュスラン公爵からアジュマーン藩王への申し出という形をとって、何事かが伝えられる。ジュスランがどのように藩王へ語ったのか、バルアミーは知ることの出来る立場には無い。

結果として、間接的ながらリディア姫の希望は通る。

初期にタイタニアからエルヴィング王国へ要求されたエネルギー鉱山の権利の引き渡しは“エルビング王国に関する政務・交渉等の全ての権限をジュスラン公爵の管轄として処理を一任する”というように変更された。即ち、エルビング王国に対する諸事項の全ては、ジュスランの胸算ひとつ、

ということになる。そうして、そのジュスランの意向は現在のところ、リディア王女の希望を叶える方向にあるように見える。

ジュスラン公爵がどのような物言いでも藩王にその譲歩を認めさせた、あるいは、権限委譲をもぎ取ったのか、バルアミーは知りたいと思う。そして、この一事に於いて、ジュスランが“お人好し”どころではない人物だということを確認させられる。

この認識変更は、リディアに対するものとは比べるべくもないほど容易にできた。その点に於いての己の未熟さを素直に認めることも出来た。――それは、ジュスランが彼より年長であり、上位者であり、なによりもタイタニア一族の主流に属する人物であるから、だろう。

それほどに、バルアミーにとっては“タイタニア”の名は大きい。

そのジュスラン公爵からの次の任務が言い渡されたのは、バルアミーの自省の心境整理の最中ないし直後である。

曰く『これより当面、ウラニボルグに滞在することになるリディア姫の身辺警護を任せる』というものである。さらに先だって、リディア姫がバルアミーの名を短縮して「バル」と呼ぶことは、彼の意思を無視してジュスラン公認の元、決定事項の様相であるような会話が交わされる。

困惑と、混乱と、自尊心に対する悪い刺激と、その他様々な感情が一度にバルアミーを襲う。そのごく一部を、表情に出してしまったことにすぐに気が付いたが、公爵閣下も姫君も、それを意に介する様子もない。

「リディア姫たつての希望」だの「悪い虫がつかぬよう」だの、さらには「光栄に思え」だの、自分はジュスラン公爵にからかわれているのか、本心からそう言われているのか、別の何かの意図があるのか、判断に困った結果の返答は「はあ」という、なんとも間の抜けた、不鮮明な、そして、タイタニア貴族かつ軍人として上官に返答するのに、本来あるまじきものになる。

「光栄に思え、バル」と、リディア姫はジュスラン公の言を復唱する。

その表情は、紛れもなく十歳の少女に相応しい、子供っぽい笑顔である。国を守りたい、と言った時の決然とした表情を思い起こせば、同一人物であることを疑いたくさえないような。

かくして、バルアミー・タイタニア子爵は職務の一環として、タイタニア一族に遙かに劣る貧乏国の十歳の王女殿下から、基本的には目を離すわけにいかなくなる。

正確に解釈するのなら、「任せる」というのは責任所在の意味も含むものだから、彼より下位の誰かをつけてしまっても、それに対して責任が持てるのなら、構わないのである。——実際の問題として、ジュスラン・タイタニア公爵の高級副官、という地位と責務は継続してあるのだから、他と平行するときには、ジュスラン公に許可を願い出ても、そういう形を取らざるを得ない状況が生じることも、いくらでも予測できる。——しかし、ウラニボルグ内部に於いては新参であるバルアミーには、この時点で、信任できると思える、彼より下位の人物が見あたらない。

現実には、バルアミーにはそういった事情より先行する認識があった。つまり、他者に丸投げして「子供のお守りさえ出来ない」という評価を他者から受ける可能性に思い至って、それを思いついてしまうと、彼の理性と性質と感情は、総出で「そういう評価を受ける可能性を排除しないわけにはいかない」とバルアミーに告げるのだ。

日常の王女殿下は、いたって元気な、否、元氣と行動力の有り余りすぎた、十歳相当の子供らしい言動をする。王族であるという片鱗は、その言葉遣いや、よりにもよってジュスラン・タイタニア公爵に対してすら、対等かお気に入りか、という態度を示す、という程度である。

その程度、といっても、バルアミーにしてみれば、その態度そのものが上下逆転にすら思えるのだが、当のジュスラン公爵本人は唯々諾々として、あるいは余裕をもって、それを受容しているかに見える。

上官がそうしている以上、そしてそれが不当なものとも、組織や陣営と

して不利なものになるとも、必ずしも言い切れることでもない以上、高級副官という、ジュスランの物理的に最も近くに身を置く配下としてあるべき立場のバルアミーが、その方針に従わないわけにはいかない。これは、タイタニアの慣習云々というレベルの問題ではなく、全宇宙の何処であろうとも、上下関係の強い組織の一員として自覚し体現すべき基本事項である。

不平と感ずることも、不満に思うことも、バルアミーにとつては大量にあるが、それを吐露することがバルアミー自身に何らかの不利を導かない保証のある存在が、その認識の内に今のところは見いだせない。となれば、そういったものは己の胸一つに、無理矢理にでも押し込んでおくしかなかった。

唯一の救いといえ、何をどう誤解されたものか、リディアがバルアミーに懐いている様相のあることである。それは同時に観光案内じみたことさせられることにも繋がるのだが、とにかくも、何処に行くの何をしたいのといちいちバルアミーかフランシア、あるいはジュスランの三者の内の誰かには先に言ってくれるおかげで、少なくとも最初のような大搜索を行う必要はなくなった。——それを救いと思わなければならない状況そのものが、バルアミーの感情を悪い方向へ刺激することに繋がっているのだが。——

何をどうとつても、現在のバルアミーにとつては、不愉快な現実、心理的に完全包囲されている状態であるのには違いなかった。

そんなバルアミーの意識や感情を解するでもなく——と、いつて、そうそう簡単に解されても、それはそれで別の意味で困るのだが——、リディア姫は今日もバルアミーをウラニボルグ見物に駆り出す。

「バル」と呼びかけては様々な物に説明を求め、あるいは目に留まった菓子類を欲しがる。バルアミーはその不本意な呼称までひっくるめて、これらの役割全てが気に入らないのを内に押し込めて、姫君の希望に従う。

何日も経たないうちに、彼女が目障りにさえ思えてくる。その感情を表に出すようなことは大人げないと思うから敢えて押さえつけるが、日に日に肥大化するそれを完全に制御できている自信は、目を追うに連れて減少しているようにも思える。

リディアを王女殿下扱いすることと、その警護主任という立場上、バルアミーは歩かないし半歩下がって歩かざるを得ないことが多い。——客観的に見れば、そこまで気を遣わずとも誰も文句はいいそうにも無いのだが、バルアミーの内には、自覚の有無は別として、一度決定された立ち位置はさしあたり、余程の、あるいは客観的に妥当な事情がなければ変えはならない、というような感覚が存在するようである。——

目障りだが目を離すわけにはいかない存在を背後から眺める内に、視界にいつからか引つかかるものが存在するのを認識する。

ぴよこん、と動く。“それ”を、いつしか目で追っているのに気が付いた。それがリディアの、一筋だけ長く伸ばした髪の毛の動作である、と認識するまでに、半秒ほどの落差があった。翠玉エメルトとも見える色の小さな球形の髪飾りをつけたそれが、重力法則に反する動きをしている。

興味が四割、興味を示す己への侮蔑が六割。併せると、嫌でも目に入るその動きが、目障りだという感情に化学反応の如く変換される。

唐突に、リディアが振り返る。

何故にこの姫君は奇妙に勘が働くのか、偶然に恵まれているのか。バルアミーが彼女の髪の毛の一部の動きを目で追ってしまっているさまを、しっかりと目撃されてしまったようである。

ふわふわピョコピョコと不自然に動く一筋を、リディアはその小さな手で、ちよこん、と捕らえる。

「悪さをする物では無いと思うが、バルに不都合があったのか？」

全く無いとは思わないが、まさかそんな馬鹿馬鹿しいことまで正直に白状せねばならない謂われもあるまい。

「特に、何も」

言い方がどうしても素っ気なくなるのは良いことではない、と思うのだが、取り繕っている余裕が、今の彼には無い。取り繕ってやる筋合いなどあるのかどうか、という感情も存在する。

そして、目の前の姫君には、その応答では納得が行かなかったようである。

「それにしても興味を持つていると思ったが……」

要らないことに勘が働く小娘だ、という言葉をはき出せたら、多少の気分は晴れるだろうが、あからさまに大人げないことをする損失の方が遙かに大きいとも思えるので、即座の返答を保留する。

傍目には黙り込んだように見えるバルアミーの心境を、リディアは彼女なりに推察しようと努力しているようだった。そして、一筋だけ長い髪を押さえつけたまま、彼女なりの推考結果を口にする。

「……タイタニアには美味しい物も珍しい物もたくさんあるから、こんなものくらいはいくらでもあるのだろうと思っていたが、もしかして、珍しいのか？」

再び、バルアミーは返答に窮させられる。

“こんなもの”と言うのが、翠玉色の球体の髪飾りを指すのだろう、という推測自体は容易に成り立つし、外れている可能性もゼロに等しいだろうが、珍しいか否かの判断は、バルアミーにはつかない。

彼が無知である、という可能性の範疇にこれを入れるのは、彼の主観的にも、客観的にも、さすがに酷というものだろう。

もっと単純に、女兒の、というより、年齢を問わず、女性の装飾品そのものに、バルアミーは興味がない。それへの興味を示したり、敢えて調べのような必要も、これまでには皆無と行っていいはずだった。

とはいえ「自分は知らない」と表現して、十歳の小娘に「無知」と解釈されるのも面白くない。タイタニア、あるいは実質上のその地理的中核とも位置づけられるヴァルダナ帝国における一般範疇として存在が珍しいか否かは、知らないのだから答えようがない。

バルアミーの困惑ゆえの沈黙を、十才の少女がどのように解釈したのかを察することは、十八才の青年には未だ不可能であった。

リディアが髪の毛の端を離すと、それまで彼女の小さな手中に大人しく治まっていた髪が、また、ぴよこん、と跳ね上がる。

「反重力装置を組み込んでいる、ただの髪飾りだぞ。バルにも知らないことがあるのか、タイタニアにも無い物があるのか、どっちかな」

些細な疑問に深刻そうな表情で考え込む姫君を無表情を装って眺めつつ、バルアミーは一気に脱力した気分を味わう。

一筋だけ伸ばした髪の毛の不自然な動作の理由の疑問は解決した。冷静に考えれば、また、判明すれば、事前に推測出来ていても不思議はない、あつけないほどにくだらない事象である。

ようやくに、バルアミーは返答をひねり出すことが出来た。

「……女性の飾りの事でしたら、女性同士の方が話もお合いでしょう。フランスシアにでもお訊ね下さい」

彼にとっては、精一杯の妥協点である。

バルアミーがその飾りの存在も普及の度合いも知らないことに、リディアが気が付いたのかどうかは、推察することができなかった。気付いて欲しくはない、とは思う。

「確かに、それもそうだな」

というの、バルアミーの先ほどの、彼にとっては逃げに回ったような返答に対する応えのようである。

リディアは再び、自分の髪を抑えては離す、という動作を繰り返している。そのたびに、反重力装置が組み込まれているという翠玉色の小さな球体もろともに、少女の髪はぴたりと落ち着いたり、ぴよこりと跳ね上がったりする。

子供の遊び道具兼用か、とバルアミーはその光景を見て解釈を付け加える。

「よし、後でフランスシアに訊いてみよう。」

それで、バル、向こうにある、あれは何だ？」

リディアは髪を離れた瞬間に、全く別の方向を指して問い、バルアミーはその対象が、今度は回答可能な物であることに安堵する。そうして、再び、なぜ自分がこんな馬鹿げたことで安堵しなければならぬのか、それに、小娘に対して逃げるような回答をしなければならないような事態に陥おとしこれられなければならないのか、と、表情には出さずに立腹する。

*

*

その日の内に、バルアミー・タイタニア子爵はタイタニアの所有する広大かつ広範囲な事象に於いての強力なデータ・ベースの中から、十歳前後の女兒の装飾品及び玩具の通り一遍の存在状況、一定広域範囲での普及度、価格や対象階級範囲等の情報を引っ張り出した。そしてその場で、決して容量の少なうはない脳と低くはない記憶力の内に、必要と思える分を総ざらいに叩き込む。そうして彼の頭の内部に叩き込まれた情報は質量共に、一度に覚えきるには膨大といつていい。

その動機は「少なくとも二度続けての失敗は許されない」というタイタニア的価値観の産物でもあり、同時に、「少なくともこの分野で、たかが十歳の小娘に対して逃げに回るような返答をしなければならない状況を、二度と作られてたまるものか」という彼自身の自尊心プライドからくる感情の産物でもある。

彼の行動の詳細内部までが第三者に知られれば、ひどく滑稽な光景に違いない、という認識も、バルアミーの意識の内に存在してはいる。けれど、もその可能性は限りなく低いと予測できることで、彼は自身の今後の自尊心プライドの保持のためと、現行任務の遂行の必要事項、と認識した情報収集を優先することができた。

判らないようにでも逃げ続ける、ということとは、選択肢そのものが彼の内には存在しない。それ自体は、タイタニア一族にあってはむしろ多数派に入る性質である。そして、そういう選択肢が無い以上、彼にとってはいかに理不尽な現実であれ、彼自身のためにも無理矢理にでも、どんな任務であれ遂行を続行しなくてはならない。そう認識を定めて、葛藤を抱えつつも、彼にとつてより有利な方向性を持つて行くため、と信じる方法と行動を実行する。

実はその、あるいは過剰ともとれるバルアミーの自尊心の高さこそが、少なくともこの件に関しては、客観的に見れば滑稽ともとれる事象を引き出している、という逆転的な現象の起因になっている、というところまでは、この時点での彼には未だ、認識できてはいない。

*

*

後日、リディア姫の一筋長く伸ばした髪を装飾する球体の色が、時折変わっていることにバルアミーが気が付く日が、さらには、特に意識することもなく、一定の範囲の理由の認識や解釈をすることが出来る日が、やってくることになる。

けれどもそれは、この時よりも随分の^{のち}後になってからのことである。

『認識く或いはバルアミーの葛藤と姫君の髪飾りく——了——』